

「物語の歴史」の先にあるもの

3年生はいよいよ入学試験シーズンでテレビどころではないと思いますが、NHKの大河ドラマ「鎌倉殿の13人」について少し書きたいと思います。

足柄高校の校長をしていたときに、神奈川県の中世武士団について、校長室よりで少し書きました。(本校のホームページに「校長室より」のバックナンバーがあります。そのNO.10です。)武士は名字にその支配する土地の地名を使うので、現在でもその武士団の支配した場所が簡単に特定できます。NO.10にあるのは、永井路子さんの著書に掲載された図ですが、みなさんの自宅近くの地名などが出てくるのではないのでしょうか。私の家は小田原市の中村原というところにあります。このあたりには中村一族という武士団がいて、兄弟や親戚が湯河原の土肥、平塚の土屋、岡崎、真田などにいました。この一族は、源頼朝の挙兵に参加しましたが、石橋山の合戦で藤沢の大庭一族らに敗れ散々な目にあいました。頼朝はその時箱根山中を逃げ、真鶴から船で三浦半島、そして房総半島へと落ちのびます。

その後勢力を立て直した頼朝が、平家軍を打ち破り、兄弟の源(木曾)義仲、源義経などが京都さらに中国地方に平家を追い、壇之浦で滅亡させたのはよく知られていますね。最初に頼朝の側についた関東の武士団は、一度は負け戦をしましたが、その後は鎌倉幕府の成立とともに政権の中核に取り立てられることとなります。鎌倉殿の13人とは、頼朝に取り立てられ頼朝の死後に合議制で幕府を支えた、北条義時をはじめとした13人の有力御家人たちの物語です。

日本史の中で平安時代をざっくりとえば、京都の貴族と寺院(僧侶)が権力を持ち、奈良時代から続く律令制度のもとで政府が支配する「公領」と、貴族や寺院の私有地である「荘園」が地方にあって、そこで農民たちが働いて税などを貢ぐという時代でした。その公領や荘園の管理を任されたり、京都への税や貢物の運搬のための交通手段を支配する人たちが武装して武士となり、貴族や寺院の争い、地方の豪族たちの争いに武力で介入するようになります。ちょっとたどろは悪いですが、今の時代でいうと、シマを争う暴力団みたいなところがあります。

そんな関東の武士団が鎌倉の幕府近くに館を構え、政治に参画するようになったわけです。当然利権争いや内部抗争は熾烈を極めました。頼朝の死後、このすさまじい権力闘争を生き残ったのは、父親さえも放逐した北条義時と政子の姉弟でした。ネタバレになるので、歴史をたどるのはこのくらいにします。

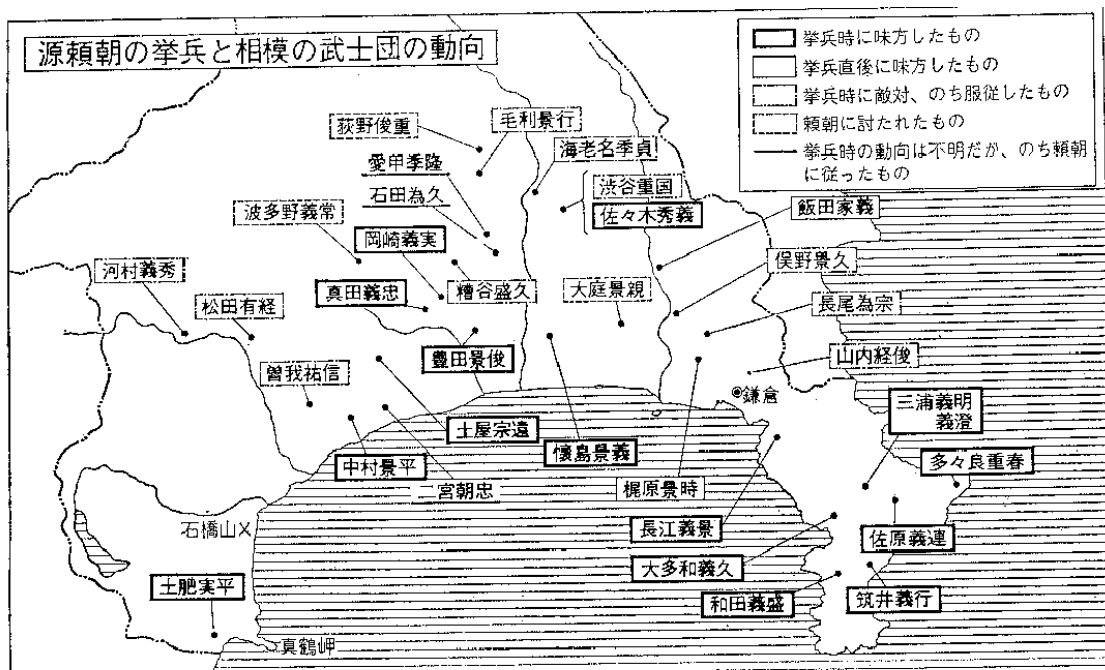
私は大学受験のときに日本史を受験科目に選択しました。変な高校生だったので、2年生のときから授業とは関係なく、教科書の最初からまとめノートをつくり、3年生になるときにはちょうど関ヶ原の合戦あたりまでノートができていました。その後3年生の秋までに何とか現代までたどり着きましたが、どうしても政治史を中心にノートをつくったので、ノートが完成した時の感想は、「日本史は波乱万丈の人々の争いの物語だ」というものでした。しかし模擬試験を受けてもあまり成績はよくなく、本番でも振るわなかったように思います。物語のような歴史は好きだったのですが、当時から入試問題は社会史や文化史などが多く出題され、得点に結びつかなかったのです。ただ、大学に入ってから社会史や文化史の講義を受けて初めて、物語の歴史の先にもっと面白いものがあることに気がつきました。その面白いものとは何か。今回はそのことについて、少し書きたいと思います。

酒匂川と足柄の歴史（3）

新松田から足柄高校へ向かうバスは、新十文字橋で酒匂川を渡ります。この時見える景色はどの方角を見てもとても美しく、晴れた日は特に心を洗われた気持ちになります。酒匂川上流方面をみると、山北駅などのある山北の中心地は、二つの小さな小山に隠れて見ることはできません。この二つの山は、向かって左側が浅間山、右側が丸山です。丸山の頂上には「TOYAMA」という会社の事業所があります。浅間山の方は、河村城址ということで公園などがあります。

今回は足柄地域に、河村氏などの「武士」と呼ばれる地域のボスたちが生まれた時代について書きたいと思います。歴史で平安時代については習っていると思います。京の都に貴族階級が形成され、大きな仏教寺院がつけられて僧侶が力を持っていました。天皇中心の政権は形骸化して、地方の農地は都から派遣された役人が管理する公領か、貴族や寺院の私有地である荘園となりました。その農地を管理する立場にいた人たちから、のちに武士といわれる階級が生まれてきます。地域のボスのような存在で、武装して戦うことを次第に本業とするようになり、また血縁を重視して一族で支配地域を固め、婚姻によって勢力を拡大したりしていました。

足柄地域の武士としては、山北の河村氏、南足柄の沼田氏、松田の松田氏などが知られていますが、これらの武士は秦野の波多野氏の一族だと言われています。神奈川西部には他に、平塚から湯河原あたりまで勢力を広げていた中村氏（土肥氏、岡崎氏、土屋氏、二宮氏、真田氏などが一族）がいました。



永井路子「相模のものごたれ」(有隣新書)より

都では平氏と源氏という二つの武士団が対立し、一度は平氏が政治の実権を握りますが、その後源氏が盛り返し、源頼朝が鎌倉に武士政権を建てました。鎌倉幕府です。平氏によって伊豆に軟禁されていた源頼朝の挙兵を助けたのが中村氏で、逆に平氏の命令で源頼朝と戦ったのが、波多野氏の一族です。

最終的に源氏によって平氏は滅ぼされますから、波多野氏とその一族も衰退していきます。そんな中で山北の河村氏の当主義秀についてはこんな記録が残っています。源頼朝に敵対して敗れた河村義秀は、大庭景義（景能）に預けられ斬首を命じられたが、景義が密にかかくまい、10 数年後の鶴岡八幡宮の流鏑馬の神事のおりに、急に出られなくなった射手の代役として弓を引いた。その見事な腕前をみた頼朝は河村義秀を許し、山北の所領も元に戻した…。

ところで、このころの武士たちの拠点となった場所を調べると、どこも現在の市街地からは離れた台地のうえや山の斜面にあります。当時平野は、まだ河川の治水が発達していなかったため、人が住んだり水田を営むには危険が多かったのです。そのため、武士だけでなく農民たちも台地のうへや麓に住み、水のコントロールがしやすい場所だけを水田とし、傾斜地で畑作をするのが一般的だったと考えられています。また、以前怒田や沼田の地名について説明したように、丘陵内のくぼ地や沢沿いなどの沼地も水田として使われていました。

そんな環境の中で、武士たちは防衛的な意味で、背後に山を背負い、井戸水が得られ、見渡しの良い場所に館（城）を構えました。山北の河村城址からは、足柄平野が一望できますし、一族の松田、沼田氏の拠点も視界に入ります。また、酒匂川に沿って内陸部にいくつか見張りの館をつくって、背後から敵が攻めてきたときには、「のろし」を上げて知らせるようにしていたこともわかっています。さらに皆瀬川は現在とは違って、山北の市街地中央付近を東にながれていたため、河村城は二つの川に挟まれた要害の地だったのです。

河村氏をはじめとしたその頃の武士たちは、戦のないときは地域の開発者として、農民を集めて土手をつくったり、水路を掘ったりして農地を少しずつ増やし、足柄平野は徐々に水田化されていったと思われます。しかし前回書いたように、酒匂川は暴れ川でしたから、そんなふうの開発された農地を何度も何度も洪水で破壊し、そのたびに人々は農地を再整備していきました。